二次元ドリームノベルズ

魔法少女インヘリート

Magical Girl Inherit

エナジードレインに屈するヒロイン

ナガレ

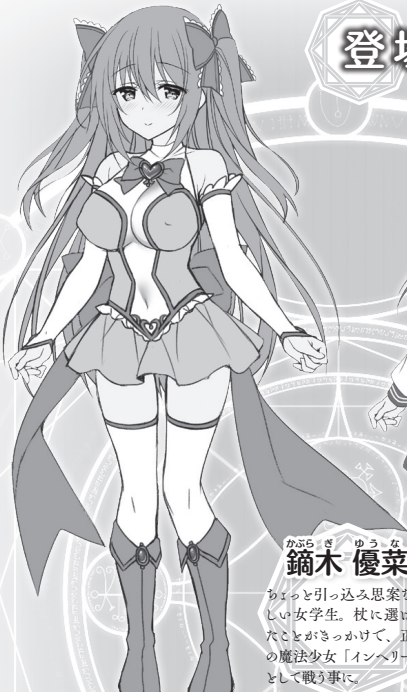
挿絵◉空維深夜

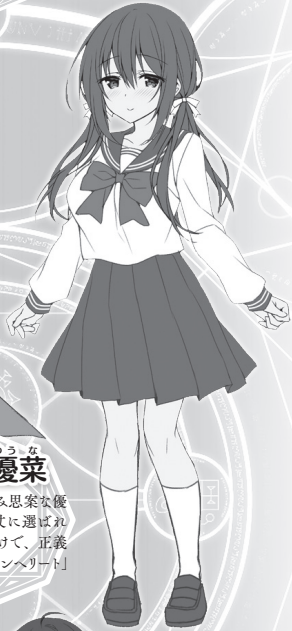
試し読み版

18 未満

第一話　杖の使徒　インヘリート　006
第二話　継承　018
第三話　鏑木優菜の敗北　042
第四話　アパタイト　107
第五話　杖の使徒　203
最終話　inheritance　256
エピローグ　324

登場人物紹介





鏑木（かぶらぎ） 優菜（ゆうな）

ちょっと引っ込み思案な優しい女学生。杖に選ばれたことがきっかけで、正義の魔法少女「インペリート」として戦う事に。

アパタイト

人類の天敵「グラトニー」の変異体。残忍な性格の持ち主で、人間を魔力の"餌"としか見ていない。

佐藤（さとう） 茉莉（まつり）

陸上部に所属する活発な少女。優菜の親友でもあり、幼い頃に両親を亡くした彼女を支えてきた。

第一話　杖の使徒　インヘリート

それは、形容のしようがない物体だった。
ボチャっ……ボタっ……ボチャリっ……。
それが蠢く度に、粘着質な音が鳴り響き、人の気配のない深夜の公園に木霊する。
物体の高さは3メートルに届かんとするほどで、幅はビルを支える支柱のよう。
その色は赤と紫の混じった肉の色で、月明かりに体表をヌラヌラと鈍く光らせた。
縦横に走る血管めいた隆起は、身じろぎに合わせて何かを循環させるようにドクリドクリと脈打って、むき出しの内臓を思わせる。
卵白じみた体液に塗れた体表のそこかしこには溝が刻まれ、そこから覗く洞からは海洋生物を思わせる触手が、数え切れない伸びて、グチョグチョと粘着質な音を立てていた。
この世のなんとも例えられない、まさしく異形の化け物が、人気のない公園を移動して、ナメクジの這ったような跡を刻んでいく。
広く薄暗い公園の道を、出口に向かって這い進むそれは、まるで明確な目的があるかのようにその進行には淀みがなかった。

広い公園の中央、今では水も通されなくなった噴水の鎮座する広場から、一本の通路へと目指して進む。この先の出口からは住宅街が広がっており、大半の住居では人が眠りについているだろう。

ぶちゅっ、ずりりっ、ぶちゅるっ、ずりりぃ……。

緩慢ではあるが、大きい体躯（たいく）は一回のストロークが大きく、どんどんと出口へと向かっていく。まるでこの先に明確な目的があるかのように。

と。

「……」

深夜１０時半を回った公園に、学生服に身を包んだ少女が、化け物の進行方向に現れた。

身長は１６０センチはないだろう。胸も肩幅も薄い、どこにでもいそうな少女だ。

彼我の距離は２０メートルほど、出口を塞ぐように少女は立ち、その視線を化け物に真っすぐに向けていた。

「っはぁぁぁ……くそぉ……店長めぇ……こんな時間までこきつかいやがってぇ……！」

誰にともなく愚痴を吐いた重たい声と同様に、その表情にも疲労の色が見て取れる。足取りは重たく引きずるように、自宅への最短ルートである公園を横切ろうとしていた。

「……学生の本分は勉学でしょうに……まったく、っとにもぉ……」

ぶつぶつと声を漏らして、ストレスを吐き出すどころかむしろ不満を育てながら歩く彼女の耳に、聞いた事のない音が届いた。

「……プギィィィッ……」

「……ういひっ⁉」

咄嗟(とっさ)に音の方に振り向いた彼女が視界に入れたのは、図鑑でもテレビでもネットでも見た事のない、化け物だった。

獲物を見つけた化け物が、なんともおぞましい悦びの声を公園に吐き出した。

次いで、身体から生えた触手をもたげさせ、少女へと伸ばしていく。伸長した肉の鞭が、粘液をそこかしこに振りまきながら弾丸のような速度で少女のもとに殺到する。

「……ッフッ……っふッッ……あ、あぁぁ、お、オバケ……？　！！」

埒外(らちがい)すぎる光景に少女は腰を抜かし、へたり込む。

伸びる触手はそんな彼女に構わず、幹から「ぼちゃり、べちゃり」と蜂蜜めいた粘液を垂らしながら少女に迫る。

死を確信した少女が身体を縮こまらせた次の瞬間、高く、良く通る声が響き渡った。

「……エスぺぇっ……ッランッサぁあぁあぁっ！！」

透明感のある声が頭上から浴びせられ、続いて化け物と少女の間に何かが割り込み、ア

スファルトに突き立てられた。
ッコォオオオオオオンンッ！
細く長い何かが地面に触れた瞬間に、重たい石が凍った湖に跳ね返されたような音と、見た事のない「波打つ」光の波紋が広がった。
広がる光を浴びた化け物のその動きが鈍くなり、物言わずとも怯んでいる事が窺(うかが)える。
その突き立った棒、いや、杖の傍らに、更に何かが降り立った。
「な、なにっ、っこ、今度はなんなのよぉっ……!?」
怯えながら、戸惑いながら、閉じる事のできない瞳が映し出したのは、化け物と少女の間に、まるで守るように足を開いて立ちはだかる、特異な格好をした女性、いや、自分と同じ年頃の、少女だった。
ピンク色を基調とした衣装を纏(まと)う少女が、光を放つその棒を掴んで握り、その先端を地面に突き刺した。
先ほど「オバケ」の動きを止めた時の音が再び鳴り響く。石突きに貫かれた箇所を中心に光の柱が立ち上り、少女を守るように包み込む。ほぼそれと同時に、十重二十重(とえはたえ)の肉の鞭が、彼女に到達しようとしていた。
が、その触手が少女の身体に触れる事はなく、光の柱に阻まれる。まるでガラス壁に押

し付けられたかのように押し返され、数十センチ先の少女に触れる事は叶わなかった。
光の壁に押し付けられた肉。それに視界を埋め尽くされて、少女の眉が顰(ひそ)められた。
「……っこのっ……！」
歯を一つ食いしばり、地面に突き刺した杖を固く握り直すと、
「くらいなさいっ！！」
言いざま、少女の腕が閃いた。振り抜かれる腕、その先端で、握られていた杖がプロペラのように回転し、張り付いた触手を巻き込みながら切り落としていく。
ビュオンっ！　と甲高い音を立てて、空気と一緒に触手を凪いで、払った。
回転に巻き込まれた肉の蛇が、断面から白濁とした液体を振りまいて地面に落ちると、やがてそれはごく脆い結晶へと変化して崩れていった。
「……イイッギィィィィィィっ……！！」
痛覚はあるのだろう。触手を切り落とされた本体が悲鳴を上げて、迫った時と同じ速度で触手を戻して格納する。
「……グラトニーっ！　すぐに倒してあげるっ……！！」
その姿を睨みつけながら少女は一歩を踏み出して、自分の身長ほどもある、赤紫の杖を薙刀のように下段に構えた。

「エスペランサー……力を貸して……！」

その言葉は、少女の口から出たとは到底思えないほどの、深い奥行きを伴って路地裏に響いた。次いで少女のそれに呼応したかのように、眩い閃光が少女を包み込む。

ッカッ……！

手の平から杖を出した時と同様に、少女の全身を青白い光が包み込み、衣服の全てを分解していく。

白魚のような指の形をなぞるようにグローブが伸び、上腕までをすっぽりと覆った。

学園指定のパンプスとソックスはこちらもそのしなやかな足を強調するかのようなエナメル質のロングブーツへと変じて、分厚い靴底に高いヒールが形成される。

光が作り出した少女の慎ましい裸体の輪郭を覆うように、上下からレオタードが形成されていく。首の半ばまでを覆い、股間までを一繋ぎにした黒のレオタードが、彼女の女性らしい体つきに沿って張り付いて質量を獲得していく。

大きめのお尻を隠すようにフワリと舞ったスカートが上下に揺れて、若々しい太腿に影を作り出す。濡れ羽色の髪の毛が根元から赤い髪に変じ、リボンが形成されて両側に纏められた。

「っはぁぁぁぁぁぁ……」

秒数にすれば二秒にも満たない間に学生の少女は、まるでアニメの中に現れるような魔法少女然とした姿へと変じたのだった。

「杖の使徒、インヘリート！　……アナタを、打ち滅ぼす者の名です！」

名乗りを上げると、少女のヒールが地面を押した。

ダッ！

１０メートルはあろうかという彼我の距離で、携えた杖を薙刀でそうするように下段に構え、化け物へと飛び出した。か細い身体の少女のどこにそんな力が蓄えられていたのか想像もできない速度で飛び出した彼女に、しかし触手の対応は素早かった。

ぐちゅっ、ぐちゅるっ、ビュオンっ！

十重二十重の触手の群れが空中を飛び交い、少女、インヘリートへと肉薄する。

視界を埋め尽くす肉蛇の群れが少女に殺到する姿は、濁流（だくりゅう）に飲み込まれる小石のようだ。

しかしインヘリートはその歩みを止めるどころか、むしろ速度を上げて、その群れの中に飛び込んだ。

「……ッハアァァァァァっ！！」

化け物が構築した肉の網の中から声が迸（ほとばし）り、光が漏れて周囲を照らした。

刹那（せつな）、肉の切れる音が響き、魔法少女を包み込んだ肉の網を杖が寸断していく。

その隙間から、杖を振り払ったインヘリートの姿が再び露出した。杖で放った『斬撃』の軌跡に、青白い光が鱗粉のように煌めいて、周囲を照らす。
彼女の細くしなやかな、女の子らしい身体に筋肉の筋が浮き、総身に緊張が張り巡らされている事を物語る。
そして、次の動作は速かった。
円柱で形作られたものが発生させているとは思えない鋭い風切り音が鳴り、化け物の触手が千切れ、裂け、寸断された端から塵となって消滅していく。
空中を舞う触手の膜に、無理やりに間隙を切り開き、その本体への道筋を作り出す。
振るわれた杖が鱗粉のように光の軌跡を空中に残して、迫りくる触手の数々を尽く打ち払っていくその姿は、鎧袖一触の姿だった。
身体を捻り、淀みなく足を運び、回避と攻撃の動作が一挙動で行われるその様は、まるで華麗な舞のような美しさを放ち、触手を、化け物を翻弄する。
そうして、数えるのが億劫なほどの触手を突き、払い、切り落とし、ねじ伏せながら肉塊へと歩を進め、
「……これで、終わりよっ……！」
手に持った杖が光を纏い、連れてその光が質量を高め始めて、次いで先端に刃を形成す

る。その形は矢じりのような尖りを持ちインヘリートが持つ杖を槍へと変化せしめた。
「……ってぇっぁあぁぁっ！！」
弾丸のような速度で、刃を番え、槍へと変じたそれが、腐肉の奥深くまで突き刺さる。
刺さった部分から化け物の白濁した体液が漏れ、次の瞬間に、深々と突き刺さった部分を中心にその巨躯が膨れ、爆散した。
千切れて吹き飛んだ化け物の身体を構成していた肉片は、爆発して四散した端から形を保っていられないとでも言うように、粒子となって分解され、やがてその粒子も空気の中に消えていく。
かくして、人の気配のない深夜の公園は、本来の何も起こらない日常の姿を取り戻した。
「……」
化け物を瞬く間に屠った少女は周囲を警戒するように目を配らせて、脅威が去った事を確認すると、へたり込んだままの学生に手を差し伸べ、
「……大丈夫、ですか？　どこか怪我とか……？」
先ほどまでの大立ち回りを繰り広げた戦士の面立ちとは違う、少女そのものの印象で話しかけた。
「え？　あ？　……う、うんっ……、なんとも、ない……けど」

あっけに取られながら手を握り返すと、杖を抱いたように持つ少女が細い腕で学生を引っ張り上げた。
「今日はもう大丈夫だと思います。気を付けて帰ってくださいね」
「え、あ、はいっ、わかり、ました……」
反射的に出た了解の言葉を聞き終えると、ニッコリと笑みを返し、
「それじゃっ」
ダンっ！
「え、ちょちょっとっ！」
人知を超えた跳躍力で飛び上がり、公園の外周を覆う樹木の先へと消えていった。
残された少女は一人、鞄を拾う事も忘れて、
「……アタシ、やっぱり疲れてるのかな……？」
ポカンとした表情のまま数十秒、そのままで立ち尽くすのだった。

○

タンっ！　スタンっ！
屋根から屋根を飛び移り、自分の身長ほどもある杖を携えた少女が夜の闇の中で躍った。
軽やかに、比喩でなく羽のように舞って、人気のない路地に降り立つと、

「っふぅぅぅぅ……」
細い息をしっかりと吐き出して、握った杖を祝詞を告げる妻子のように捧げる前に突き出し、
「……ありがとう、エスペランサー」
そう「希望」の名を冠する杖に向かって言葉を発すると、
ポウッ……。
杖が淡い光の粒子となって掻き消えて、次いで衣服も制服へと形を取り戻していった。
「……グラトニー、……また少し、強くなってた……」
その手に残った感触を確かめるように拳を軽く握って、
「グラトニーから、皆を守ってみせる……アタシが、絶対……」
決意を固めた瞳で自分にそう言い聞かせ、彼女、鏑木優菜（かぶらぎゆうな）は帰路へとついたのだった。

第三話　鏑木優菜の敗北

午後三時四十分。学生たちが待ち望んでいた六時限目の終業のチャイムが鳴り響いた。

午後最後の授業が終了する鐘が鳴り、教室の空気がふわりと緩む。黒板に走らせていた手を止めて教師は生徒に向き直って言った。

「……それじゃ、明日はこの続きからやるからなー」

授業に使う資料をトントンと机に押し付けて整え、そのまま教師が教室を後にした。

優菜の通う学園では教師の数が少ない事もあり、ＨＲの時間は存在しない。生徒の数もそこまで多くなく、素行の悪い生徒もいないがゆえに行える運用だと言えるだろう。

そしてめいめいに学園生たちが鞄を持ち、部活に行く者、仲良しとおしゃべりに興じて座り直す者、帰途へとつく者それぞれの放課後を過ごす。

座りながら優菜が帰り支度をしていると、ひと際元気な声が投げかけられた。

「優菜ー？　今日なんだけどさ、ボクの分のご飯は大丈夫だからね。……にひひひっ、今日は監督が焼肉奢ってくれるんだって！」

元気が溢れている少女は、今宵の晩餐に満面の笑みを浮かべていた。

「あ、ズルい。じゃあアタシも今日は豪勢にしちゃおうかなぁ」
水曜日は茉莉の母親が仕事で帰りが遅いために、優菜の家で食事をするのが習慣になっていた。
「へへへー、って訳で、今日ボクはそのまま家に帰るからよろしくね！」
そんな二人の会話を見て、傍目で見ていたクラスメイトが言葉を挟んだ。
「あんたたちねぇ、今の、夫婦の会話じゃない」
呆れたような声で会話を茶化した。
「……へ？　夫婦？　え、ボク女の子だけど」
何を言っているの？　そんな表情で、問い返す茉莉の表情と頭上には大きな「？」マークが浮かんでいた。
「仲がいいわね、って言ったの！　そんな胸して男と間違わないわよっ！」
通じなかった皮肉の説明をしたクラスメイトは自分の鞄を持ち上げて「それじゃね」と吐き捨てて教室を後にした。
「茉莉、今度の大会頑張ってね」
「あえ？　あははっ、ありがとっ！　ボクも今回の短距離、手応えあるんだよねぇ。先輩にも褒められたし」

快活に歯を見せて笑うそれは、どこまでも朗らかで、太陽の光を沢山浴びたヒマワリを思わせる笑顔だ。
つられて笑顔になった優菜は、気遣わしげな声で問いかけた。
「無理だけはしないでね？」
「うんっ、わかってるってばっ！　……っといけない、それじゃボクも練習行ってきまーすっ」
鞄を肩に引っかけて悪戯な笑みを浮かべて教室を出ようとする茉莉を、
「はい、行ってらっしゃい」
優菜は母親のような笑みをその顔に浮かべて手を小さく振って見送った。
「さて、と……」
宿題用の筆記具を鞄に詰め直し、どこにでもいる普通の女の子、鏑木優菜は下駄箱へと向かったのだった。

○

日もまだ高い帰り道。
同じ服に身を包んだ学園生たちに紛れて、優菜は帰路へとついていた。
なんの変哲もない街並みに、なんの変哲もない日常。

それがどれだけ尊いものであるのか、杖の使徒として役目を継承した今では理解していた。

今代の杖の使徒として覚醒した優菜は、様々な知識を獲得した。

主たるものは戦闘の技術や知識、その理由と弱点。グラトニーの生態、そしてグラトニーとの戦い方。

その内の大事な一つが、「社会生活はキチンと営む事」というそんな事心だった。

社会生活を正常に行う理由としては、金銭の問題も第一に挙げられるが、それ以外の問題の方がより重要だ、と知識は教えてくれた。

グラトニーという化け物を倒すための存在、それが杖の使徒、インヘリートと呼ばれる存在だが、その歴代の誰もが、元は普通の女性だった。そんな人間が、戦いに明け暮れる「だけ」の生活を送ればどうなるか、深い恨みを持つ者が、どんな末期を迎えてしまうのか、それを杖の中の知識は知っていた。

戦うために戦う。そんな人生は送ってほしくないし、送るべきではない。そんな祈りめいた意思も込められていたのだ。

化け物を倒すためだけに生き、化け物を殺すためだけに生活する。そんな人生を歩んだ杖の中の意思の一つが、その記憶が、その事を教えてくれていた。以前の使い手の一人だ

ろう意思は、生前に誰の事も慮る事はなく、誰に慮られる事もなく。人間関係を極限まで希薄にした末に、化け物と相打ちになって、誰に看取られる事もなくその生涯を終えた。

その事をずっと後悔しているようだった。

守りたい。その意思は高潔なものであっても、怒りや憎しみとも結びつきやすいものであると、優菜の魂に理解させていた。

その教えを守り、通学路を一人歩き、

「今日は晩御飯どうしようかなぁ……一人分だし、簡単なものでいいかなぁ……」

独り言いながら歩く通学路で、なんでもない一日を過ごそうと献立に思いを馳せた。

何でもない道で、何でもない日で、そして、何も起きるはずがない平坦な道で、「それ」は起きた。

っぞ、ゾゾゾッ……！

「……っ！」

優菜の眉間と首筋に悪寒が走って抜ける。

「……グラトニー……」

顔をしかめ、その原因の名を口にした。

「……っふーっ……」

今感じた悪寒。それは、あの路地裏で杖と邂逅した日に味わった、化け物が現れた事を示すサインだった。
魔力の量が低い者には感じ取れないだろうものだったが、インヘリートとして覚醒した彼女にはその限りではない。
感じた魔力の方に顔を向けて誰にも聞こえないように呟いた。
「おかしい、昨日の今日で……？」
昨日、そして今日。
二日連続でグラトニーが同じ町に出現した事など、杖の知識の中ですら今まで一度もなかった。
何かが起きている、そう確信すると、
「……とにかく、倒さないと」
張り詰めた意識を更に固く締めて呟いた。
理由を云々しても、結局為すべき事は一つなのだ。
片手で鞄を持ったまま、もう片方の腕を自分の胸に押し当てる。
胸に重ねた手の平から、鱗粉めいた光が溢れ、舞い、広がって、優菜の身体をコーティングしていく。

認識阻害の魔法。それを自らの全身にかけていく。
鱗粉にも似た淡い光が優菜の身体を包み、体中に染み込んで馴染む。これで余人の目には映りはしても、意識はできない。
「力を貸して、エスペランサーっ……！」
その言葉に呼応して、制服が光となって分解され、インヘリートとしての姿が構築されると同時に、全身に杖の使徒の力が漲った。
道を行く同窓の徒や通行人はまるでそれに気付かずにめいめいおしゃべりに興じ、注意を向ける事もない。
「……っあっち……！」
オフィスビルが立ち並ぶ一角の方向に首を巡らせて、次の瞬間には人知を超えた跳躍力で飛び上がり、民家の屋根を乗り継いで、一直線にその場所へと向かっていった。

○

丁目を三つほど移動した先に辿り着いたのは、誰も持ち主のいないビルだった。
入り口は裏口にも渡って厳重に施錠され、内部には誰もいないだろう。大きく張られたテナント募集の看板には所々錆が浮き、設置から年月が経っている事を忍ばせる。
「……ここに、グラトニーが……」

その中に、許されてはならない化け物の反応が感じられる。優菜の、インヘリートの眉間に皺が寄るほど強烈に。

耳目を集めないように、侵入経路と定めた屋上のドアノブを破壊し、内部へと足を踏み入れる。

錆の音を響かせて開かれた鉄扉が、埃臭さとカビの匂い、そして化け物の気配を内部から漏らしていた。

内部は暗く、電気も通っていない。採光窓も存在しないために、踊り場は極端に視界が悪かった。

日も落ちる前に、

「……っふぅー……」

これからの戦闘に即応できるように呼吸を吐いて、全身に柔らかい緊張を張り巡らせた。

（大丈夫、反応はそこまで大きいものじゃない……いつも通りやれば、絶対大丈夫……！）

頭の中で覚悟しながら、握る杖に光を灯し、その明かりを頼りに階段を下っていった。

下のフロア内部はやはりどこにも電気が通っておらず、薄暗い中を歩き、検知した魔力の出所に向けて進んだ。

階を二つを下った所で、感じ取れる気配に混じってぐちゅぐちゅ、ぶちゅぶちゅという

音が耳に届いた。
気配を殺し、その音の出所に歩を進め、辿り着いたのは、一つの大きな部屋だった。
他のフロアと同様、打ち捨てられたオフィス用品に書類が散乱した、大きな部屋。ハメ殺しにされた窓からは、まだ白い日の光をすりガラスが散乱させて取り込んでいた。
その部屋の中央に、それはいた。
「……ッッ！」
ぶちゅっ、ぐちゅっ、ぐちゅるっ、ぶちゅっ……。
巨大な芋虫の姿を持つグラトニーが、その身をのたくらせ、自身が吐き出したであろう粘液を地面との間で捏ね回す。
体躯は屋上で見た貯水塔の太さを備え、ヌラヌラと体液で濡れたその身体には余った肉で段が刻まれ、生理的な嫌悪感を催させる醜悪な見た目。
そしてその姿はインヘリートを少なからず驚愕させた。
「……なんで、またこんなサイズのグラトニーが……！」
昨日、そして今。二日連続で発生するのも珍しい事が起き、そして今までの中でも指で数えられるほどに巨大なサイズである事。その事実は、道すがら感じた疑問を更に成長させてしまうサイズだった。

「……とにかく、倒してから考えよう……！」
理由を云々する気持ちを戦意でひとまず覆って隠し、杖を握り込んで魔力を流し込む。
「……っふぅぅぅ……」
握った手に意識を集中して、肌の内側、骨の内側、肉の内側、血液よりももっと深く、体内を循環する魔力を杖に流し込む。
ドクン、と胸が高鳴り、体温が上昇し、細胞の全てが、身体の隅々までもが昂(たかぶ)っていく。
房中術や性を奉ずる宗教などが世界に散見されるように、魔力のコントロールと快楽は密接な関係にある。
絵本に見る魔女が何故色を好み、笑うのか。その理由が今彼女の身体を駆け巡っていた。
「……」
魔力の解放による興奮を戦意にすり替えて、部屋の中へ飛び込んだ。
……っぶちゅるっ、ぐちゅっ、ぐちゅるぅっ！
鈍重そうな見た目とは裏腹に、化け物の反応は速かった。
高まった魔力に気付いたグラトニーが、その身体に生えた様々な形状の触手を伸ばし、インヘリートに迫る。
その他のグラトニーがそうであるように、逃げ場を完全に塞ぐ触手の網が包むように押

し出され、視界を埋め尽くす。
「っふっ！！」
優菜はそれに僅かも慌てる事なく、細く鋭い呼吸を吐き出して杖を振り払い、伸びた触手の横腹を杖で切り裂いて結晶へと変え、回避するためのスペースと、攻撃するための道筋を同時に作り上げた。
振り払った運動エネルギーを殺さずに、半回転するように足を踏み出し、ビルの床を強(したた)かに踏み抜いた。大きく露出した背中がグラトニーに晒され、うっすらとかいた汗が光を反射した。
ぶちゅっ、ぶちゅるっ、……ッグゥゥイィィィィィっ……！
人類の敵がどこから出したのか見当もつかない鳴き声を発すると、十重二十重の触手が、インヘリートに伸ばされる。鞭であり、触覚であり、味蕾(みらい)であり、生殖器でもあるそれらが、極上の獲物を逃すまいと肉のカーテンを作り上げて迫る。
しかし、杖の使徒には、人類の敵にとっての「天敵」には、それですら遅すぎて、足りなかった。
「っはぁぁぁぁぁ……！！」
振り返って構えたその杖には、光が質量を獲得し終え、矢じりのような刃が形成されて

いた。

グラトニーの視界にそれが映ったと同時に、「溜め」の完成しきっていた足が、腰が、腕が、指先が、化け物を倒すための杖を目にも留まらぬ速度で射出した。

停滞しきった空気を寸断しながら一直線に進んだ刃がグラトニーにめり込み、肉を裂き、その内部の感触を優菜に伝える。

「っはぁぁっ！」

手首を回し、突き立てた刃で内部をえぐり、魔力を化け物の奥深くに注入していく。

触手の全てを阻んだ光の柱と同質の、グラトニーだけを拒絶する魔力の奔流が体内に注ぎ込まれ、次の瞬間。

腫瘍の成長を早回しで見るかのように、内側から膨張した芋虫型のグラトニーが爆散し、肉の塊からキラキラと光る粒子へと変化して、打ち捨てられたビルの一室に満ちる。やがてそれは空気と同化していった。

化け物を倒した優菜は、しかし構えを解かず、自らの産毛（うぶげ）のそよめきを感じるほどに全身に神経を巡らせて周囲を警戒する。

「……いったい、何が起きてるの……？」

グラトニー。食欲のみに突き動かされる、インヘリートの、人類の敵。

その発生は非常に不規則で散発的なのが常だった。
大気に満ちる魔力を糧に、それが人間や動物に取り込まれず、溜まった淀みの結実がグラトニーだと考えられている。事実、それを裏付ける出来事は杖の知識が知っていた。
人間の信仰などによる魔力の解放が行われ、その供給が断たれた場所といった特定の条件が揃った場所では、かれらの生育の環境が整ってしまうのだ。
「……」
しかし、今のこのビルにはそんな気配はない。
人の往来もあるだろう道に面したこの廃ビルに、信仰を集める、あるいは集めていた形跡は今のところ見られない。
「……とりあえず、少し調べてみましょうか……」
その原因があるのであれば、それを断たねば元の木阿弥なのだ。
建物を調査する為に、芋虫がいた地点に背を向けてその部屋を後にしようと歩を進めた。
その、次の瞬間。
……じゅるるっ、ぶちゅぅッ！
「なっ⁉　……あぐっ⁉」
コンクリートがむき出しの天井から伸びたグラトニー、それが植物の蔓のように垂れて

優菜の首筋に縋(すが)り付いた。

（……そんっ、なっ⁉　もう何もいなかったはずじゃっ……⁉）

咄嗟に見上げれば、ただの天井でしかなかったはずの部分がいつの間にか肉に変じ、そこからグラトニーが垂れ下がるように伸び、自身の首筋を掴んでいた。

インヘリートの魔力によるグラトニーの検知。それをしくじるだなんて事はあり得ないはずだった。

グラトニーは魔力によってのみ構成されている化け物で、インヘリートの魔力の検知は数キロメートル先だろうと見逃す事はなかったはずだった。

だとしたら考えられるのは、

（……ッグラトニー、っ進化、してっ……るっ……⁉）

グラトニーの変異体。魔力の検知を掻い潜る個体が現れたと考えるのが自然だろう。

首筋に巻き付いた異常な個体は、しかし普通のグラトニーと変わらない分泌液で身体をヌルつかせ、人肌より高い体温の不快な感触をコスチューム越しに伝えた。

その感触とグラトニーに接触を許した事への危機感が、冷や汗を出させる。

「あっ、っこ、このぉっ！！」

すぐさま気を張り直し、首に巻き付いた化け物を撃退するために杖を地面に叩きつけよ

うと右手を振りかぶった。
このサイズのグラトニーならば、光の柱で容易(たやす)く撃退できるだろう。そう考えて。
しかしそれよりも、化け物の行動が数瞬勝っていた。
振りかぶられた杖が頂点に達し、光の柱を立ち昇らせるための魔力が注がれる。
グラトニーはそんなインヘリートの首筋に口吻を押し当てて、
ズチュウゥゥゥゥゥッ！
「……あっ⁉　……っがひっ⁉　……っひっ、っひぃぃぃぃぃっぃっ！⁉」
はしたなすぎる吸引音を立てて彼女の身体に漲る魔力を吸い立てた。
そのおぞましさに、その恐怖に。
「あっ、あぁぁぁ……っ」
そして、魔力を吸われるその気持ちよさに。
優菜の喉から悲鳴が迸った。
「……あっ、っっぐっ、ひぃぃぃぃぃぃぃっ！！」
瞳がブルブルと震えて焦点が定まらない。
血液に電気を流されたかのように、身体が自分の意思を離れて動き、振りかぶられた杖、
それを握っていた手が開かれた。

カラン、と、コンクリートと杖が鳴らす金属音が廃ビルに響き渡り、インヘリートの武器が埃の堆積した地面に転がり落ちる。エスペランサーが纏っていた淡い光は解放される事なく空気中に散り、使い手の手から離れたそれは、ただの金属の棒へと変わった。

「あぐっ……っはっぐっ……!?」

優菜はそれに気付けてもいなかったろう。首筋に走った快楽の奔流、それに惑乱するばかりだ。

「っひっ、っひっ、っひいいいっ……！　うっひっ、っひいいいっ……！」

横に引き結ばれた口からは、歯列の間から引き攣った声が漏れ、飲み込む事が叶わなかった涎がいくつも筋を作り上げた。

驚愕に、初めて感じる気持ちよさに見開かれた目の端に涙が浮かび、腕がだらりと真下にぶら下がって、しっかりと身体を支えていた脚は内股に畳まれて頼りなげに震えていた。

（魔力、っす、吸われ……、ったあぁぁ……！　……っこ、っこんっ、なぁあぁ……！っき、きもち、い、なんっ、っへぇぇ……！）

数秒を経て、何をされたのかを自覚した。

今この身体を襲っているのは、恋人ができた事すらない彼女にとって未経験の快楽。房中術の最奥、「魔力を放出する」という無上の快楽が注がれたのだという事をも自覚させた。

「んいっ……！　っひっ、くぅっ……！」
裏返りそうになる瞳を懸命に押しとどめようとして瞳が揺れる。
耐え方がちっともわからない快楽の爆発に、身体の軸が定まらず、内股の形に折りたたまれた脚がモジモジと切なげに蠢かされる。
「っこ、っこぉぉ、おぉ、こんなの、っへぇぇっ……！」
出した事もない甘くだらしない声を、呂律（ろれつ）の回らない口が吐き出して、与えられた快楽を反芻（はんすう）させた。
そんな獲物に、首筋に取り付いたグラトニーは追撃を押し付ける。
ぬちゅっ、れるっ、ねるっ、ぬりゅぅぅ……。
「んひっ⁉　っひっ、っや、ああ、あぁぁっ……」
舌を伸ばし、優菜の首筋に、媚毒粘液をたっぷりと纏わせたを粘膜を押し付け始めた。
グラトニーがコスチューム越しに舌を這わせる度に、身体がピクリピクリと跳ねて、出来立ての汗を煌めかせ、慎ましい乳房を波打たせた。
「っはっ、はうっ、ああぁ、っはぁぁっ」
首筋で行われた魔力の吸引、その甘さが残る首筋が、どうしようもなく熱を持ち、妖しい性感が注がれる。

「ああひっ♥　っひぎっ♥　んっひいいいいんっ♥♥　い、イケ、イゲなひっ……っひいいいんっ♥　っはあぁぁっ♥　っこ、これキツ、きちゅいいいっ……んいいいぃ♥」

イキ損ねた腰が絶頂を強請ってグネグネと踊り、アパタイトの目を楽しませた。

汗に塗れテラテラと光るお腹に、触手の影が浮き、お臍の下までを膨らませる度にお腹の紋が輝いて、魔力を吸い取っていく。

「っこ、っこれへっ♥　つ、辛いひいぃっ♥♥　きちゅ、きちゅいいひいぃっ♥♥　あぁ、あぁぁっ♥♥」

性知識の薄かった優菜が強制的に覚え込まされた絶頂。

その頂の味は、魔力を解放するものとセットであると、脳の深くに刻まれてしまっていた。

人間の手では味わえない、到達できないあの強烈な快楽。

それを与えられるではなく、与えられない煩悶が、戦士の意識を圧迫していた。

「それじゃぁ、気が変わったら言って頂戴ねぇ♥」

口角を上げて笑い、どこまでも軽く言うアパタイトに、優菜は反応する余裕もない。

「いっ、イッ、いっでるっ、のにぃぃっ……！♥　あおっ、おっ、おおぉっ♥♥」

絶頂には到達している。なのにそれでも、本当の到達には程遠い。

「っはおっ♥　おぅ♥　おおぉぉっ♥　っごおぉぉぉっ♥♥　っきひゅっ、きひゅぃぃぃんっ♥　なに、なにこれへぇえぇっ♥♥　っへおぉおぉっ♥」

折り重なって襲う「半端な」絶頂に、優菜の目が左右相互いに上下した。

鏑木優菜の人生で味わった事のある性的絶頂は、その全てがグラトニーの手によって覚えさせられたものだ。それら全てが魔力の放出を伴って、果たして優菜の脳には、その甘美な味が強固に記憶されていた。

知ってしまうと変わってしまうものがある。

房中術の究極の到達点。魔力の放出を伴う絶頂という強烈な味わいが、優菜の精神に物足りなさを覚えさせていた。

じゅぶっ、にゅぶっ、じゅぶぶっ、じゅぶぅぅっ！

「ああぐっ♥　っぐっひっ♥　っひっぎぃっ♥　イグっ♥　いんっぐっ♥　っぐぅぅぅぅぅっ♥　……うあぁ、いい、いいげっ、イゲなっひいいっ♥　あぁぁっはぁぁ♥♥」

どれだけ激しく突き込まれても、どれだけ最奥を可愛がられても。

最後の一押し、一番の到達点には届かない。

「あいっ♥　っひっぐっ♥　ひぐっ♥　イグっ、……うぅぅぅぅっ♥♥」

腰を振り、お腹の中に収められた触手を締め付けて、身体が勝手にあの暴力的な絶頂を

強請っても、お腹に刻まれた刻印が、魔力の破裂を防いでみせた。
「あっ……っ、んううぅっ、にいいいっ⁉♥♥」
（い、イけっ、中途半端にしか、イげなひぃいっ♥　んあぁあぁぁっっ♥♥）
イキ損ねた身体が痙攣して、非難を訴えるように尿をしぶかせて。
ぎゅくっ、ギュクンっ、ガクガクっ、ガクガクガクゥッ！
「んひぉおっ、おっ♥　おおおっ⁉♥　おおっほおぉっ♥♥」
腿に、腹に、鎖骨に。全身のありとあらゆる筋肉がデタラメに締まり、影を作って浮き上がらせても、決してその先には到達できない。
そんな彼女の煩悶を嬉しそうに眺めたアパタイトが言葉を投げかける。
「その紋は、貴女の魔力の放出を絶対に許さないわぁ。……嫌だったんでしょ？　魔力を食べられちゃうの」
「っそ、そんっ、んおおぉぉっ♥　っそ、っそんにゃのっ♥　い、イっ、いぃっイケにゃひっ、なんっへぇぇっ♥　あっ、あおぉおぅ♥」
（ずっと、このままっ、なんへっ♥　っそ、っそんなのっ、おっ、おかひぐっ、なっひゃ……♥　っで、でも、魔力食べられちゃうの、も、もっと、ダメ、らめへぇっ……♥）
アパタイトの嘲るようなその言葉に、むしろ精神の背骨に力が戻った。

何をすべきで、何をすべきでないのか。それを思い出し、みっともない喘ぎをかみ殺そうと歯を食いしばって、自分の決意を言葉に乗せた。

「っぐうひっ♥　っふひぃっっ♥　んっぐっ♥　っぐぅぅぅっ……♥♥　った、たへっ♥　耐えっ、るんぅぅぅぅっ♥♥　っわ、わらひっ、っはぁっ……い、いんへりぃと、なんらか、らぁぁ……♥　あっ、あおぉっ♥　おおぉっ♥」

睨みつけたつもりでも、勝手に蕩けようとする瞳に眉では、目の前の化け物を睨み返せなかった。

「……そうこなくっちゃぁ♥」

笑うと同時、優菜の真上の部分が盛り上がって伸び、先端には穴が形成されて、極太の触手が形成されて白濁の粘液で優菜の頭頂部を汚した。

「ううっひっ♥　いいひっ♥　っひっ♥」

何が起きているのかを、イキ損ねた煩悶の只中にある優菜は気付けないまま、引き攣った喘ぎを漏らすばかりだった。

「それじゃぁ、本格的に、イジメちゃおうかしらぁ♥　あぁはぁ♥」

ドロォ……べちゃっ、べちゃっ！

「あうひっ⁉　いいっひいぃぃっ♥」

頭頂部から首筋にかけて走った粘液の感触に、それですら優菜は甘い悲鳴を上げた。
「……あ、うあっ、な、なにっ、う、上ぇ……？」
見上げたそこには、
「……あ、あぁぁ……」
自分の頭を飲み込むのに容易い程の肉の筒が、大口を開けて涎を垂らしていた。
「……あ、っ、ううううぁあぁぁッ……っま、まひゃっ、まひゃかっ、あぁぁぁ……」
蠕動する幹に合わせて、内部の壁面にびっしりと生えた繊毛がワサワサと蠢いて、生理的な嫌悪を喚起させた。今この触手が何を獲物として見ているのかを明白にしたそれが、欠片の逡巡も見せずに、
「いいっ、いいっやあぁっっ」
バクッっ、もちゅっ、もちゅっ、もちゅぅぅっ！
「んっむうぉぉぉぉぉぉんっっっ！！」
優菜の恐怖の顔を、その悲鳴ごと収めていく。
「んっむうぐぅぅぅっ⁉　っはぶっ、っはぶっぁぁぁっ♥　っへっひっ♥　ううういぃっ⁉」
（っき、気持ちいい、臭い、気持ちいい臭いぁあぁぁっ♥　頭、食べられっ♥）

頭を飲み込む筒の内部は、部屋よりも尚濃厚なグラトニーの匂いが充満して、頭部全てに押し付けられる肉の感触と、嗅がされる強烈な匂いで優菜の精神を破壊していく。

「んっむぐっ、んっぶううぅぅっ、んむぉっ、っへっぼっ、んっべへぇぇあぁぁっ、っひやっ、ひいやぁぁぁっ♥♥　ぁぁっはぁぁ♥♥」

（ああ、ああぁぁっ、アタシ、頭っ、食べられてっ、っるうぅぅっ⁉　なのにっ、なんで、なんでこんにゃぁっ♥）

突如頭部全てに訪れた肉の感触に、身体が痙攣し、空中に固定された身体がビクビクと揺れた。首筋までに押し付けられる内臓の感触。今の彼女にはそれですら性感を感じさせる。

生物的な恐怖に、そして気持ちよさに股間が緩んでコスチュームから尿が吹き出して地面を汚した。

もちゅっ、もちゅっ、もちゅもちゅっ、もっちゅっ！

「んっぶぁっ♥　ああっぶっ♥　っはぶっ、んむぅうぅおおあおおっ♥♥」

蛇が獲物を咀嚼をするように蠕動して、戦士の意識を更に追い詰める。

破裂せず、吸引もしない。快楽と魔力を熟成するかのような、地獄の焦らし責めが始まった。到達をしているのに、魔力を吸われる時のあの頂点には届かない。

何度も何度も強制的に味わわされたあの境地には届かない。
「おおっほおぉぉおぉっ♥　っぎ、ぎもぢっ、いぃっひぃぃっ♥　んむおっ♥　おおっもっ♥　んあ、なの、なのにひぃぃっ♥　っこっ、こんにゃっ、中途半端にゃ、にゃのっ♥　おおぉおんっ♥　おがひくなうっ♥」
飲み込まれていない部分を不様に振りたてて煩悶を逃がそうとしても、なんの意味もなく、自身の枯渇しかかっている体力をいたずらに消耗し、恥ずかしい液体を振りまくだけ。
その彼女の耳に、肉越しに声が響いた。
『辛いだろうから、気が紛れるようにしてあげるわねぇ、インヘリートぉ♥』
触手の壁から聞こえる、そんなアパタイトの声が響いた次の瞬間に。
『……おっ♥　んおおぉぉっ♥　っほおぉおぉぉんっ♥♥』
『っはっひっ♥　っひっ♥　っひーっ♥　ううっひぃぃぃんっ♥♥』
『えおっ♥　おっ♥　んおおっ♥　おっ♥　おおっほおぉぉおっ♥♥』
「あ、うあっ⁉♥　っは、っはぁあぁぁっ……♥♥　あ、っこ、っこれっ、っへぇえぇっ……⁉　っ女のひと、たちのっこ、っ声っ……あぁあぁっはぁぁ……⁉♥」
何人もの女たちのあられもない獣の声が、頭をしゃぶる触手の奥底から響いて反響した。
『っや、やらっ♥　あおっ♥　おおっほぉぉおっ♥　おっぱい、おっぱいやらぁあぁぁ♥

乳首ペロペロしちゃ、あ、あぁぁぁ』

『っはっひっ♥　腋、腋ヒィィっ♥　吸うのりゃめっ♥　あ、あぁぁぁぁっ♥　ベロベロもらべへぇぇっ腋で、腋っ、あおおぉぉぉっ♥　腋イギするうぅぅうぅっ』

『んっひいいいいいんっ♥♥　痛、痛いよぉぉっ♥　おおっほっ♥　っほおぉぉんっ♥お尻叩くの、もっ、っもっ♥　やらのぉぉぉっ♥　っへおおぉぉっ♥♥』

年齢も声質もバラバラな、しかし声音は一様に正体をなくした浅ましい声たちが、逃げ場のない優菜の耳朶を震わせ続ける。エコーのかかったそれらはまるで脳を揺さぶるように、逃げ場のない優菜の意識を追い詰めてゆく。

「んむぅぁっ♥　あ、あぁぁぁ、らべっ♥　らべへぇぇえっ♥　った、助け、助けなきゃ、なのにひぃいぃっ♥　んむちゅっ♥　イ、イギっぱなひっ、っれへぇっ♥　うう、動けないよぉぉっ♥　っはぶっ♥　んぅっ、んうっ、っむぉぉぉんっ♥♥」

内部で繋がっているのか。跳ね上がった顎、その視界の先の空間を通して聞こえてくる浅ましい声たち。声質も声音もバラバラな、絶頂を叫ぶ声が幾重にもなって優菜の鼓膜と心を揺さぶった。

視界を埋め尽くす肉の壁に頭全てをしゃぶられ、気持ちよくされながら聞かされる女たちの嬌声が、優菜の頭に何をされ、どんな絶頂を味わっているのかを想像させる。

疑似体験をさせられたかのような錯覚。
女性たちがされている事を想像する事しかできず、また、想像する事を強制されて。
「ああっぶっ♥　あぶっ♥　んむうぅぅっ♥　んむぉぉおぉぉおっ♥」
逃げ場を封じられ、他人の絶頂を耳に注ぎ込まれ、絶頂を強請るように外部に露出した腰を揺さぶり立てる。
ネチネチと股間を舐めしゃぶる触手はその動きに合わせて引き、また押し、もどかしいばかりの刺激だけを与え続ける。
ブチョブチョ、グチョグチョと耳障りな音と、くぐもった女たちの嬌声だけが響く。
『オマンコっ♥　おおぉっ♥　マンコやばいひぃぃっ♥　イグっ♥　イッグっ♥　おおっほっ♥　っほぉぉんっ♥♥　子宮いっでっ、イッでるうぅぅっ♥　イっだらまら吸われるのにひっ♥　イっぐうぅぅうぅぅっ♥♥』
『たしゅけっ、たしゅけへぇぇっ♥　アクメしゅるっ♥　吸われでっ、何か吸われでへぇっガニ股でアクメさせられゆぅぅっ♥』
『んにひぃぃっ♥　お尻クチョクチョやらっ♥　おっ♥　おおっほっ♥　恥ずかし、恥ずかしっ、かりゃあぁんっ♥　お尻のヒダ、全部エッチに変えられちゃっ、あおおぉっ♥　っす、吸うのらめへぇっ♥　で、出るっ♥　出しながらイったうぅぅっ♥』

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

二次元ドリームノベルズ422

魔法少女インヘリート
エナジードレインに屈するヒロイン
【電子書籍版】

著　者
ナガレ

装　丁
マイクロハウス

発　行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル1F
●編集部TEL.03-3551-6147／FAX.03-3551-6146
●販売部TEL.03-3555-3431／FAX.03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、
ホームページ上に転載することを禁止します。
本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。
また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©Nagare 2019
当ファイルは、二次元ドリームノベルズノベルズ『魔法少女インヘリート エナジードレインに屈するヒロイン』
（2019年8月30日　初版発行）に基づいて作成しております。

http://ktcom.jp/

本作品のご意見、ご感想、読んでみたいお話、ジャンルなど
どしどしお書きください！　読者の皆様の声を参考にさせていただきたいと思います。
手紙・ハガキの場合は裏面に作品タイトルを明記の上、お寄せください。

◎アンケートフォーム◎ http://ktcom.jp/goiken/

◎手紙・ハガキの宛先◎
〒104-0041 東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコウビル
(株)キルタイムコミュニケーション　二次元ドリームノベルズ感想係

ライトノベルのドキドキじゃ満足できないアナタに送る官能小説雑誌！

【偶数月】
隔月発売
2・4・6・8・10・12月

妄想最前線を疾走する非現実系・不思議Hコミック誌！

【奇数月】
隔月発売
1・3・5・7・9・11月

正義の乙女が犯され、敗北絶頂をキメるアンソロジー！

【電子版】
毎月配信
書籍版は奇数月発売！

二次元ドリームマガジン
2D DREAM MAGAZINE

COMIC UNCOMMON コミックアンシリアル

敗北乙女エクスタシー
Defeated Maiden Ecstasy

あなたのキモチイイをお手伝い！キルタイムのアダルトコミック誌

電子書籍版も好評発売中

全国の書店・各種通販サイト、およびダウンロードなどで好評発売中！

KTC 編集・発行 キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ！ キルタイムコミュニケーション 検索

二次元ドリームノベルズ

異世界シャイニングテラーシャ

日常に密着したエロス、
リアルな舞台設定で送る
官能小説レーベル！

女刑事美優
暴漢は白昼の路上で

リアルドリーム文庫

「小説家になろう」の男性向けサイト
「ノクターンノベルズ」
から書籍化！

姫騎士がクラスメート！

ビギニングノベルズ

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

異世界でチキる妹

あとみっく文庫

呪詛喰らい師

あの人気作品の
外伝作品もあり！
電子書籍でしか読めないエッチ系レーベル

戦うヒロインを屈服させちゃう
かなり過激な
陵辱系ライトノベル！

ドキドキラブラブな
ハーレム系
ライトノベル！

フリーダム120%!?
ジャンルにとらわれない
ドキドキ★ラブ！

ザ・ハイスクール・ヒーロー

二次元ぷち文庫

二次元ドリーム文庫

KTC 編集・発行 キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ！ キルタイムコミュニケーション 検索